

ポエムの窓

文・高安義郎

かさばな
風花

高安ミツ子

冬空を鮮やかに彩っていた
皇帝ダリアが一晩に内に
霜枯れてしまった朝
義母は静かにみまかりました

冬が南天の赤い実に寒さを結んでい
くように

沢山の思い出を私に結んだまま
義母は永久の眠りにつきました

最後は自分が誰であるかも
生きている風景も見えなくなっ
てしまった

義母の寂しさを思うと
まだ暖かさが残る義母を

何かで包んであげたいと思っても
私は自分の顔を重ねて泣くことしか

できませんでした
あなたと最も近い距離にいられた

はずの時間は
別れの深さをつたえていました

夫と二人で見送った朝
義母から託された約束の

ナデシコの浴衣を着せました
そして お化粧をすると昔の面影が

甦り
安らかな顔になりました

ここ数年

義母をつなぎ止める言葉が見つから
ず

波がひいていくように私たちから遠
のいていきました

それは誰かが大きなヤツデの葉を振
り払って

義母の記憶を消していくようにも思
える重い日々でした

施設を訪れるたびに夫は

遠のいて行く母への思いを

千羽の鶴に折り込んでいきました
そして今日の折り鶴は

「苦しむことなく飛び立てるように
飛翔している鶴を」
と夫は申します

二人とも黙って別れの気持ちを折り
ました

今 帰宅した義母を迎える我が家の
庭は

冬枯れで寂しいけれど
義母が好きだった カマツカが赤い

実を残しています

見上げると澄んだ冬空を風花が舞っ
ています

義母との三十四年間響き合った時間
から

もう、はぐれてしまった寂しさが私
を濡らしていきます

風花は静かに眠る義母をいとおしむ
ように

冬空を舞っています

同人誌『玄』より

十数年に渡りこのコーナー『ポエ
ムの窓』は私高安義郎と妻のミツ子
が交互に執筆を担当してきました。

高安ミツ子はインターネットの
ホームページで千葉県詩人クラブの
広報を十二年間担当し、この間に千
葉県詩人賞を受賞したりし、詩集も
二冊刊行してきました。

この度紹介させていただいた作品
は、義母、つまり私の母を見送った
時の高安ミツ子の作品です。

よく世間では舅と嫁の仲を険悪な
物として見るのが相場ですが、確か
に全くの他人が共に暮らすのですか
ら、始めはギクシャクする事もあっ
たでしょう。ですが二人は気質が似
ていたのでしょうか、母も妻のミツ
子も、人の気持ちをくみ、共に暮ら
す楽しみを見つけていたようです。

母は多趣味の人でした。若い頃は
舞踊を楽しみ、盆栽の手入れに熱中
し、晩年は墨絵を描いたり陶芸を楽
しんだりし、自分の作ったペン立て
などを多くの方に貰って戴き、それ
を喜びとしておりました。趣味の中
でも庭いじりは若い頃から晩年まで
長く続き、今は『みのりの郷』となっ
た元「緑花木センター」の一角に展示
場を借り、二十年近く盆栽やら山草
やらの販売も楽しみました。

ミツ子と母は息子の私以上に接す
る時間を多く持ったわけで、折に触
れ色々な話を聞いたのでしよう。母
の人生や親戚づきあいの方法、昔か
らの行事等は、息子の私以上に知っ

ておりました。

また母は生前「体は中元小物の様
に、気位は加賀百万石の殿様のよう
に」とよく言っていました。生きる
上で、この言葉を妻は受け継ごうと
思ったようです。そして人に託す心
と慈しむ心を踏まえた家文化がある
ことを母から学んだと話しています。
更に、両親との生活を通し、精神の
再構成が出来た時期であったとも述
懐しています。

その母がアルツハイマー病を煩い、
五年間家で看病しましたが、ミツ子
は実に献身的に世話をしました。そ
の後徘徊が始まり仕方なく施設に世
話になったのですが、ミツ子は毎日
のように母を見舞いました。

嫁も息子も判らなくなってしまう
たある時、「ミツ子ってどんな人だっ
た」と聞くと。「あの子は良く気を
遣う子だった。あんな子が家の嫁
だったら良かったのに」とそんな事
を言ったことがありました。

母がみまかったのは、十二年前の
十二月でした。丁度一回り過ぎたの
を機会に、この作品を紹介すること
にしました。

この作品は母の葬儀後間もない頃
の作品で、母から託された庭の草木
の名が散見し、義母との思い出をま
さぐっているように感じられます。
作品には義母への深い情愛と別れの
哀しさが表現されています。